



宋王履宗通著



馬陸後句集

成章堂藏板

玉ちふ神ひじりの大御代ときよ
 敷島の道ひろく君が御代く
 つたはりて、とのみやびたる中より
 たはやきぶりのたはやすき道なり
 出て、上がかみゆ、下がしもまで、心ひ
 としく芭蕉葉の風にうちなびきて、
 人のこゝろの和がさる限はあらじ。
 爰に亡師青蘿その山あひかしこ
 の浦輪に杖を曳ける事あまた度な
 り。其道すがらあめつちの心のま
 まなれる句の、麻もさわたもあまた
 の夏冬をたちかへつゝ、ふみのはし
 りに聞へけるを、あが友淡路國なる柴山
 青岐寫涼がこゝろを同じう

して、まめに書あつめし草稿あり。
 亦居士をしたへる人々が玉箱に
 おさめ置るあり。あるは滄海に網
 して拾ひ得たるあり。是をつらね
 て六も、あまりのほ句あり。そを
 杜（蘆）魚の爲に失はんもほゐなく梓
 にのほせむと、姫府の社友玄駒ひた
 ぶるにせめけるを、玉の緒のみじか
 き心にもあらでうち過ぬるが栗の
 枝葉につながれる人らが、庭のをし
 へのたづきともなさまく、とゑりを
 もせず、四つの時の季を分、あるは神
 釋戀無常名所羈旅等のそのものも
 のにあたれるを、あらかじめ部をわ

かゝる形を以て其の果の如くは強
なる葉前の花に――主として其の
心より其の形を以て其の如くは
なる形に山にひらたけり。人
あはれは其の如くは其の如くは
よのちのちよのち。几上にあつた
なはれは――其の如くは其の如くは

序

世に得がたしとこのめるものは、おほかたはまとなき事にて、つばめの巢に貝を求めるごとく、火ねづみのかはきぬも、めらくとぞ焼ぬべき。たゞいつはりなくて、くちすたえせぬは、こと葉の道なれとて、青蘿句集をあめる人あり。此叟世にありし時は、ひたすら芭蕉の方寸にせまり、その實をまなびうつせると、氷と水昌（晶）とのごとし。かの晋子が申せしやうに 時代蒔繪といふものゝ、年へて。そこねやおれざるどく、風情の實を盡せる言葉は、なき世のいまになりても、かく天に求め地に拾ひて、やがて人のたからとなれると、ありがたきわざなるべし、これをよみ是を見ん人、また叟がまとの心をつたへ、はがひの中の玉を得、かはぎぬの火にいりても焼うせぬさかひに至るべきものをや。此集のはじめに一語をそへよと、遠き國まできこえこしける、いまのくりのものとまとの心をあはせて かつしかの野人

青蘿句集



拙作青蘿句集



栗本青蘿發句集

春之部

咸貝

曙や淡路を春のしなさだめ
初日かげ人に先さす恵かな
誰戀ぞ田毎にみつる初日かげ

予が栗のもとなる三昧庵を、尾
上高砂のながめ近きかたへうつ
して、香松庵とも呼そめぬ。わ
きてひがしのかた打ひらけ、春
をむかふたよりも、先淡路島を
心にとむれば

青海の春よりうつる草の庵

關東の古郷もわすれがたく、關
西のしたしみもわすれがたし。

光陰我れもふ事をまたず。

鹿兒に十とせ綱手にかへす今朝の春
蓬萊に眼をかよはすや淡路しま
散ればさく春に今朝逢ふ命かな

鹿兒のわたりの綱手に引とゞめ
られて、この里にかくれすみけ
るも、はやはたとせ近くなん侍
れば、替らぬ春をむかへし事の
うれしさを、先なきちゝはゝに
告奉るとて

蓬萊のうへにやいます親二人
初日影鶴に餌を飼ふ人は誰
薄雪の戀寐かなひて花の春

世をいたふ身は我としをさへわ
すれたりしに、ある人より法師
は初老のはるに逢ひ給ふとて、
衣服など恵まれけるに、さもあ
りやとて

十徳のうしろに來たり今朝の春

題若水

草廬に梅あり、梧堂あり。うめ
は春のこゝろを匂はし、梧堂は
薪水に信をつくす。

若水を汲につけても庵のはる
明星の色を外山のはなの春
蓬萊やおのころ鳥をつみ得たり

まめやかにしも春たつはね釣瓶

立春

春たつや梢の雪にひかりさす
華に先二日ちかよる二日かな
雪を出て雪よりも青し松の風
三反の田麥みどりに庵の春
先春に空はあは雪梅つばき

子日

かの極樂といへるは、杉葉立
たる又六が門、と詠給ふもい
と尊し。

酒屋出て我は杖引子日かな
子日せむ鶴見る岡のとまりがけ
引添て杖にもむすぶ小松哉

人日

七種や七日居りし鶴の跡
七草やなくてぞ數のなつかしき
なゝくさや明日は野寺の初薬師
薺うつ遠音に引や山かづら
薺けふ六葉七葉にもさかへけり

暮つむ野や枯萩もおもひ草
まな板にうすくまかるゝ暮かな
暮うり我子になれよ錢くれん
暮うつさを見るかに小田の鴈

若 神

若草やあるがなかにもしら菫
春もはや十色にあまる小草哉

左義長

おどろかすよとの音や夕山邊
正月の榮花にほこる爆竹かな

梅

しら梅やたゆむあらしにほの匂ふ
梅さくやうときもおりに小盃
宵闇の名もある里かうめの花
梅がゝのちかまさる時薄月夜
あざやかに一輪づゝやうめの花
白梅や骨正月の塩かげん
節の日やあらかた開く梅の花
草庵の東隣は野梅かな

四方より道踏よする野梅哉
夜あらしの皆花となる野梅哉
能なしも寐ぬ夜がちなる梅の月
月の梅匂ふは花のひらくかも
梅をしたふ其夜の夢や嵯峨のあたり
闇の梅日頃の辻子にたもとほり
やり梅の流れし先や淡路島

柳

水の氣の取付初るやなぎ哉
けふ既に寒皆盡る柳かな
山かつらかけて遠目の柳かな
打かけて月をゆるがす柳哉
ひかりさす闇のあらしの柳哉
月もやゝほのかに青き柳かな
月花の外をおぼろの柳かな
青柳や折らんとすれば枝もなし
芹
淺澤や雪かたゝの芹の花
消る雪の味やとどまる白根艸

我影の白髪をつまむ田井の芹
箋

天地に今朝うぐひすの初音哉
初音して鶯たれをおもひ艸
うぐひすの木瓜もいばらも初音哉
鶯の池をかゞみにはつ音哉
うぐひすのあたり見廻して初音哉
黄鳥の音や雪の戸の玉箒
朝風呂にうぐひす聞や二日酔
黄鸝にさげものやらん屠蘇袋
うぐひすの茶入を覗く水屋哉
鶯の聲 白梅 歟 紅梅 かな
白 魚
しら魚は梅につれだつ盛哉
餅の雪や春の薄氷
春 風
春風にのべふすいろや淡路島
散のこる葉を春風のもみち哉
あるが中に菟弱玉も春の風

春風にさかふて濁る野川哉

春雪

春の雪梅には深きけしき哉

降込や棚なし船に春の雪

山茶花のおはりしほらし春の雪

梅が香のつもれる物か春の雪

雪解 凍解

雪とけてみどりの色や圃土

月けぶりと夜もとけ行野川哉

凍とけや野づらに高き鶴の脛

陽炎

陽炎や春の汗干下小袖

西行庵にて

かげろふを手に取ほどや柴の庵

霞

行さきや眼のあたりなる野の霞

高根まで青麥の世や夕がすみ

涅槃會

ねはん會や散飯に誠をなく烏

傾城の拜んで笑ふ涅槃像

幾春の繪の具や兀し涅槃像

春月

浅川の末ありやなし春の月

野は焼きて雲に雪もつ月夜哉

春の月さすがに障子一重かな

雪のまゝに竹うちふして朧月

梅散りて古郷寒しおぼろ月

藪入 出替

藪入やつゐでに古き墓参り

出替の笑にふくむなみだかな

養父入やうきを五日のわすれ草

雉子

雉子啼て跡は歛うつ光かな

己が音に驚き顔の雉子かな

子をおもふ聲とやけはし夜の雉子

麥によき雨をきゝすのうらみ音か

春鷹

春の雁立さはぎては日をおくる

行こゝろさえかへる日や小田の雁

なき友を算へて立か小田の雁

鴈人に馴るゝ貌なるわかれかな

雲雀

時雨ほど聲ふりかゝるひばり哉

はなのさく草は巢にせであげ雲雀

蝶

蝶ねふれ薄衣きせん日の最中

風の蝶きえては麥にあらはるゝ

蛙 田螺

田の水の高ふなるかも啼蛙

からすきにからき目見たる田螺哉

猫 戀

のら猫の艮にまたるゝ戀路かな

角はゆる迄啼つらん猫の戀

菜の花

雨に暮るゝ日を菜の花のさかり哉

菜のはなを見て来て休む野寺哉

よしの出てまた菜の花の旅寐かな

鐘

はなさけり古きを祝ふ鐘の宿
雛戀ふる親のこゝろや夜の鶴

沙干

遠島や沙干にかける牧の駒
うれしさについつかれたる沙干哉

網のうちを、智あるはされ、お
ろかなるはといまれ。

かしこくて蟹は通行沙干哉

春日

春の中のけふは誠のはる日かな
鶉鷄のみだれ尾に引春日かな

春雨

降ぞともしらで暮けりはるの雨
はる雨や接木見に行園の奥
落つみし椿がうへを春の雨
春雨や茶に呼東舎と西隣と
寐つかれて月のはる雨見る夜哉
はる雨の赤瓦山に降くれぬ

桃

色深し今年よりさく桃の花
桃山や行盡されぬおぼつか

櫻

月も山も其ほとり也はつざくら
此景色誰三日月のはつざくら
寺も世をたのむこゝろや八重櫻
曙を深くかゝへて山ざくら

人をまたで散るはさくらの誠哉
松の奥うすく暮る櫻かな

さくら見るけふも時雨のやどり哉

定なきをさだめ、窮りなきを
はむ。

定なきをさだめて散る櫻かな

(さだめてはカ)

花

春の夜のみじかきは花のあたり哉
浪の間はさくらうぐひや岸の花
散る花や夢かとぞおもふ袖袂
はなの中折く曲る小坂かな

花守の折らるゝもしらぬさかり哉

ひやくとこゝろ靜りて夜のはな

ぬれ簀に落花をかづく山路哉

盃の流るゝはなの絶間かな

散はなによき人がらや黒小袖

散花のはなより起る嵐かな

花曇

須磨あかしのひわたれるほ
どを舟にて過るとき

潮疊あわぢのさくら散やせん

満汐に持あふはなの疊かな

緑棠

山吹や池をへだてゝ入日さす

山吹も世につなかるゝたぐひかな

春水

浅茅生にめぐり初けりはるの水

すゞりにも茶にもうれしや春の水

雜春

庭掃かぬ我名やたてそさぬたづま
柳牙をふきて又一日はだひら雪

春秋も常のこゝろを松のはな
あまのりは江戸紫の匂ひかな
夕汐や月跡碎く小只取
如月に取つく野邊の景色哉
きさらぎや山茶花寒きわすれ花
井のもとも草薺のはる邊哉
はるの山何事もなきながめかな
雀子のもの喰夢か夜のこゑ
はるの海遊びわすれて啼鳥
いかめしき聲や日すがら花の虹
おもしろふなれば別れや桃さくら
野の梅の咲よりかよふ田打かな
門なみにさくや山家の梅椿
はるの海鶴のあゆみに動きけり

暮春

からし菜の花に春行なみだ哉
行春や飛かふ蝶の心はしらす
わさくれに酒のむはるの名こり哉
ゆくはるは夢にかくれて仕廻けり

夏之部

更衣

君が世の治まれるけしきは、
何事につき侍りても、難有き
いやまされるを

鎧着る世ならばいかに更衣
蝶ひとつ竹に移るや衣がへ
あさ貌のはやおもひあり更衣
更衣うすき命を祝ひけり
綿ぬきて水になさばや花の夢
佛生會
散けしの中に生るゝ佛かな
奉扇會
摘すとも花あり香あり白扇
牡丹 芍薬
はなのうへにこゝろ皆置牡丹かな
芍薬はかよはき花のうてなかな
給着て牡丹にむかふあしたかな

芥子

色器粟の巧みに見ゆる苦かな
白芥子や美人かくるゝ草の庵
しらけしの崩るゝ程の天氣哉
白器粟に照りあかしたる月夜哉
ながき日のあまりを芥子の一重かな

杜若

杜若ものゝすゞしきはじめ哉
鶯鶯のかざしの花かきつばた

卯花

風寒し卯の花原の明くらみ
卯のはなのさなみに疊る澤邊哉

杜鵑

花の夢の薄雲さらでほとゝぎす
我宿の山梔子しろし杜宇
夜の一聲こゝろにをくるほとゝぎす
蜀魂なくや矢をつく雨の中
千度なけば憂を添るぞ、郭公
横雲に耳つけて寐むほとゝぎす

閑居島

衰ふる春より啼ぬかんこ鳥
日たゞ啼を日たゞ聞身よ鵲鳩
山一里われを送るか諫鼓鳥
はなのあと枯よと啼敷かんこ鳥

菖蒲

あやめ草綾の小路の夜明かな
戀のはしもかくるやあらもあやめうり
あやめふくけふもはなより草の庵

田植 青田

植つけし夜は三日月の門田かな
松かけに追／＼かゝる田うへかな
覺へんとすればとぎるゝ田唄哉
夜は君が手枕の手を田植かな
我庵はひる寐する間に青田かな

螢

藪かけやさゆりの花にとぶ螢
月の夜は地に影うつる螢かな
瀬の螢水を羽音にみだれけり

竹裏舎にて

笹の葉の夜散ほどや飛ほたる

鶉 水鶏

鶉のかゞり消て曉の水寒し
畫の鶉の現に鳴か籠のうち

あら面白の川なみや あらうの

世の中や。

世わたりや鶉繩の上も十二筋
聞うちにしへまぼろしの水鶏哉
おもしろやふりむく鶉あり行鶉あり

瓜

あだ花の猶なつかしや瓜のはな
瓜の葉の瓜をつゝみて冷しけり

納涼

すゞしさや八十鳥かけて月一つ
松一本馴てうゝみのたよりかな
舟に病みし身をうし窓の夕涼
笹折て赤蟹なぶる夕すゞみ
すゞしさや惣身わするゝ水の音

雜 夏

道をあらそふは隠者のたのしむ
ところなり。

三つよれば其師やあらん蝸牛
我隣 蠶に 交る 麥の 秋
角あげて牛人を見る夏野かな

誰知盤中餐 粒々皆辛苦

田艸取うた泣にはまさる夕景色
歛を取葉はこまかよ豆のはな
葉には其うらみもあらむ葛の花
若竹に月のうすものかげけり
口なしの淋しう咲り水のうへ
夏やみやこゝろをすゝむ鉢の菊

飲酒一盃の寐覺、去此不遠の淨
土をしれり。

寐ごゝろや萌黄の蚊屋の薄月夜
暑き日や撫子つまむ山のかげ
ゆふ立や秋を催す黍ばたけ
萍やはづれては又月のうへ
蚊一つに身をくれかねて宵寐哉

栗本青蘿發句集

人は皆横に目がつく横に行盧問
の蟹のあはれ世の中、とかく貴
き御製、あへて人のをしへと
なるは、蟹の事なりける事を

よしあしの其まゝすどし蟹の穴
秋近し露に溢るゝつゆの月

李雨のぬしが初旅のいへづとゝ
て、よしの山の花屑、伊勢の濱
萩の葉など送られる。さすが
に風雅のしれもの、かの富てつ
たなからさるのうか。

狂へとて夏の胡蝶に花の塵

秋之部

秋

ぬけて行茅の輪の先や夜の秋
松の蟬啼つゝ秋に移りゆく
あなめく秋風たちぬ竹婦人
草の戸の見事や今朝を露の秋
秋たつや人さめわたる艸の庵
蚤ふるふ袖行合ぬ今朝の秋
夏瘦のふしぐ高しけさの秋
起臥に立添ふ秋敷庭の艸
土用より朝貌咲て今朝の秋

七夕

盡ぬ世のためしを星の逢夜哉
草の戸の年のわたりや萩の反
海士が子の乾かぬ袖をほし迎へ
曉の築に落けり天の川

空蟬を見るにも星の別れかな

魂祭

賑しやよき世の人の魂祭り
ほし合のうらさびしさよ魂まつり
なるゝ間のなきもはかなし魂祭

野分

芭蕉薺の野分見に来よ坊が庵
岩角をふみかく胸の野分かな

相撲

母親に見送られけり角力取
勝角力花も咲べき男かな

秋風

あぜ豆の黄ばみ初けり秋の風
一さかり萩くれなるの秋の風
朝貌も實がちになりぬ秋の風

稻妻

いなづまのむら穂に通ふ田面哉
稻妻や今朝より森の薄紅葉

露

風の間や置ならべたる草の露
大粒に置露寒し石の肌

薜

朝貌や清きかぎりをさき出る
薜や横日すゞしき花の上
梅の後薜のはなの一輪ぞ
あつき夜の朝貌の花に明にけり

蘭

蘭の香も閑を破るに似たりけり
らにの香やをとろへ初る日の移り
蘭の香や糸なき琴のしらべより
らにの香や碁盤の面打かすり
蘭の香は薄雪の月の匂ひかな

女郎花 薔薇

霜にそむ秋に逢けり女郎花
糸の矢先に似たり唐がらし

秋蝶 秋蚊

秋の蝶いかなる花を夜の宿
しら／＼と羽に目のさすや秋の蝶

秋風に白蝶果を狂ひけり
秋の蚊やおのれつらしと蠶もなく

虫

むしの音やこぼれもやらで萩の上
我夢の化してや床のきり／＼す
虫の音に折／＼わたるあらし哉
聞となく耳に置けりきり／＼す
棚もとや處もかへず蟋蟀
忘想の寐覚預けんきり／＼す
松むしよ美人の袖に落て死ね

萩

吹分る中まで萩のさかりかな
暮るゝ間を繪帛に染ん露の萩
しら萩やいざよひの間を散初る

月

月と我中に今宵のけしき哉
我門を踏出すよりけふの月
こよ更て月のこゝろを離れたり
花ほとゝぎす今宵の月のほとり也

名月や地に引替る天の川
名月や宵は夜中のひとむかし
名月や松にかゝれば松の花
名月やふくるにつけて泣上戸
坐に老し人花咲て月見かな
筆とりて四隅にわかる月見哉
松風の寐覚ばかりか軒の月
有はかたりなきは数添月見哉
雑水(炊)に月のあかりの榮花かな
癖になりて寐られぬ月の夜頃哉

天明らかなる年にあたるといへども、巳午五ツ六ツ未の春に至れる迄、風雨のいくたひか人のこゝろを驚し、五穀も是が爲に實をむすぶ色うすく、高きいやしきに及べるもいと諱すしく、すでに下れる世となりなんとせしに、久方のあめの恵み、夏夕立に秋早して、殊に月見る夜ごろは田毎の三ふし草みのりて、いとめでたきけしきにめで、

玄駒沈洲あるは東國洪筈愚寒か

いわたこゝろを船につみて、あ
ら井川のながれの上に今宵のか
げを待むたり。予も淡路の法師
を携へて此船の客となりぬ。

稻の香の満るを今宵月の雲

十六夜や闇かと見れば花すゝき

いざよひやすこしはかゝる柿の誰

既望は葉がくれに見る蘭の香ぞ

いざよひや芭蕉の上は皆月夜

居まち月や友ます庵の夜の庭

秋雨

秋の雨月に對して猶悲し

秋雨や一羽鳥の歸るそら

砧

とし火に風打付るきぬた哉

うき身うつと人や聞らん小夜砧

蕎麥花

此頃の銀河や落てそばの花

月を實にむすびやすらんそばの花

雁 鶉

春秋と移る夢路や雁の聲

羽音さへ聞へて寒し月の雁

いくつらも雁過る夜となりにけり

おもひなくて何やら雁のなつかしき

栗の穂やひとほしづみて啼鶉

鹿

鹿の聲高根の星にさゆるなり

寐時分や戸に吹付る鹿の聲

町中へよごれて出ぬ戀の鹿

角の上に曉の月や鹿の聲

驅やちかふ宵曉の鹿の聲

そげくゝと瘦し貌なる朝の鹿

菊

三日月にかいわるきくの苦哉

憎きまで菊に愁ある隣かな

雨の菊かくれ過たるけしき哉

市中閑居吟

菊の香も市のへだてや下地念

後月

曉はまことの霜や後の月

後の月蕎麥に時雨の間もあらね

尾花

秋の日やうすくれなのむら尾花

既になき色を秋ふる尾花かな

鶏頭

鶏頭の黄なるも時を得たる哉

鶏頭や倒るゝ日迄色ふかし

秋の暮

戸口より人影さしぬ秋の暮

柱にもこゝろもよらず秋の暮

秋の暮誰まことよりさびしきぞ

ながむれば海また海や秋の暮

秋のくれこゝろの花の奥を見む

雜秋

中くゝに月は入日の秋の山

おそはれし夢よりつのる夜寒哉

秋風をあやなす物か赤とんぼ

身にふるゝ秋は露哉小萩かな
引かひもなきや鳴子のばらゝ黍
落栗や翌の命も山の奥

紅葉

水よりや染けん岸のした紅葉
見るが内に霜置月のもみぢかな

嵐山にて

山も川も谷もあらしの紅葉哉

暮秋

秋の月いづつよさかけて鳴ちどり
うつりあし冬の來ぬ間に今朝の霜
せまり行秋や晝なく岡の虫
行秋や晝はあはれに水はかなし
風たへて小春ごゝろに秋くれぬ

冬之部

時雨

竹裏舎にて

初しぐれ自在の竹に吹かゝれ

簀むしの死なで鳴夜や初しぐれ
梅嫌小粒に赤し初鐘しづめ禮

しぐれけり土持あぐる芋がしら
二夜三夜寐覺とはるゝ時雨かな

こゝろおさまりて時雨聞夜は、
墨繪の竹のすれあふ音も聞ゆな

り。

何所やらに花の香すなり小夜時雨

芭蕉忌

瘦像に魂を入歟小夜しぐれ

あかしの浦に、初てはせを忌を

いとなみ侍りて

淡路より時雨もすなり月も照

夢にだに芭蕉翁を見ず

翁見む夢のしぐれは誠にて

茶花

茶のはなやありとも人の見ぬほどか
ちやの花のからびにも似よわが心

麥蒔

蒔つけし夜より鶴鳴岡の麥

そばかりやよこれし袖もなつかしく

大根引

雪前や岡の月夜に大根引
忠度の腕これ見よと大根引

枯野

三日月に行先暮るゝ枯野哉
茶の木見て麥に取つく枯野哉

木がらし

木がらしや二葉吹わる岡の麥
雪を催す夜の木がらし面白し

氷

氷夜や疊にしぶる上草履
松風の落かさなりて厚氷
あちきなき果を添水のこぼり哉

千鳥

冴かへる空音は星かさよ千どり
なく千どり廿七夜の月の海
あけ月や風のひかりに啼ちどり
おもふ事吹取夜半や啼ちどり

水鳥

水鳥やのこらす守る人の顔
おもひ羽に月さす鶯のうき寐哉

斤鸚

袂まで来て歸けりみそさどむ
黄葉赤葉それかあらぬか斤鸚
捨石のかげで飛けりみそさどむ

生海鼠

苦しみをはなれて動く生海鼠哉
うき人のこゝろにも似しなまこかな

霜

初しもや水ひた／＼の蘆の葉に
燈火のすはりて氷るしも夜かな
しら菊に赤みさしけり霜の朝

炭竈

すみがまや焼人みえて猶寒し
炭竈や雪の上行夕煙り

埋火

埋火に松風落る響き哉

埋火や梅の苔もあたゝまれ

花の散には春をうらみ、月の曇
には我身をおもふ。

埋火やいく夜かあぶる鼻ばしら

火鉢、火桶

長明の記に、かせきのちかくな
れたるにつけても、世に遠ざか
る程をしる。あるは埋火をかき
おこして老の寐覺を友とす。

うき時は灰かきちらす火鉢哉
桐火桶霞うぐひすのこゝろあり

鉢叩

白髪より細き世や經ん鉢叩
鉢たゝき老の力のありたけ歟

冬籠

たる事や世を宇治茶にも冬籠
冬籠米つく音を算へけり
冬籠夜をりの病時を得し

雪

初雪や實は降のこす藪柑子

しは／＼と降に音あり夜の雪

暮の雪水にもつもるけしき哉

面白や袖をはらへば棲の雪

雪の夜やわすれ／＼に梅匂ふ

雪の人見ぬ世の友の風情かな

こゝろ皆竹にふすなる夜の雪

別莊や膳のかよひも夜の雪

こゝろだに置處なき深雪哉

大雪の夜を打崩す景色かな

寒念佛

まよひ子を呼聲たえて寒念佛
川筋や千鳥にかする寒念佛

寒月

鳥飛て高臺橋の寒の月
荒海に人魚浮けり寒の月

雜冬

岡の麥茶の木は古き眺望哉
爐びらきや先ありつきし母の顔
罌粟苗に今朝いたゞきぬ霜の花

薄雪に甘みやさゝん梅嫌

今朝もまた霜はねかへす蝨かな

山茶花や雀顔出す花の中

曉のなみだ氷らん網代守

初雪の跡さかりなる枇杷のはな

年 忘

夢の世の夢を見る間や年忘

年わすれ忘寐に着る蒲團かな

うき戀に似し曉やとしわすれ

歳 暮

行年やかしらをあぐる田のひばり

行としや馬をよければ牛の角

ゆく年やとても難波の橋の數

世の外の身にも師走のあらし哉

淡路の法師、我庵をとぶらひけるに

年の市にまぎれ出けり蜂の憎

きのふけふ枝ぶるかえつ年の梅

千尋あれ硯の海も年の波

かくれても望たへず。あら
はれても又おなじ。

年／＼や年の麓のあすならふ

匂ひしは夢にや見たる除夜の梅

松の悲しき秋風の樂にたぐへし

水の音に、流水の曲をあやつる

藁は是つたなければ、人の耳を

よるこばしめんとにもあらず。

獨しらべひとり詠じて、自から

こゝろを養ふばかりなり。

おもしろう松風吹けよ除夜の闇

栗本青蘿發句集

寛政二庚戌冬十一月十七日
紅葉之御會

かけまくもかしこき

御神の御末にあらせらるゝ雲の

上までも、芭蕉てふ翁のたは

やきぶりのめで度聞しめさせ

られて、こたびそが道のつか

さなさせらるゝに、いせをの

海士のかづきすも、須磨のも

しほ波つるも、あるは鹿兒の

わたりの綱手ひきけるすら、

やどなき

御庭のみまへにおしのばりて、

鶯鯉のうたとなる事の、さ

ざれ石の千世經べき數く、

生ふる草木の葉どのすゑく、

までも、有難き色は冬のけし

きもなげなるにぞ、そのこゝ

ろを賦して奉るとて

日をいたゞきて冬もます穂の薄哉

御宿題

殿前紅葉

眞砂までてりしく園の紅葉哉

落葉支流

とへる御題を、あ
るかたより給ふに

吹ためて水に色添ふ落葉かな

辛亥春三月十七日

花之御會御宿題

殿前花

我等までや御目通りの花のかけ

神祇

春神奉納

しら梅に散り込られて心清し

岩上奉納

岩上やかみさびませばほとゝぎす

神路山にいたりて、はやく髪お
ろせし罪をかなしむ、五十鈴川

に袖うちしぼりて

我眼には霧のみ拜むなみだ哉

釋教

他力安心のこゝろを

彌陀にすがる姿を風の柳かな

當麻染井寺

つゝし折て染井の雫結ばや

如是相

うき寐すなりひとつ湊の鴈と船

達磨忌や夜は更るとも更ぬとも

戀

妹がりや宵更初るうめの月

戀をせば滋賀のあたりや朧月

うす雪の曙を我こひ寐哉

かたおもひ齒にも合さる鮑哉

雜

此部に出すは無季の句のみに
もあらず。いさゝかよかかはり
たるを出す。

かゝるうき世の中にも、佛は其

まゝ物にさはらざりけるを

さきかゝる梅風の朝雨の朝

其日暮しといふ事のたふとく、

何事もたゞ今たゞ、時の外なき

事を行ずるうちに、年くれ春き

たりて年々新なるこゝろを

青柳にむすびかゆるや柴の庵

蝶となる虫かひ得たり草の庵

月を見るうしろは寒し草の庵

攝穂辭

世に攝穂といふ名さへおかしき

に、たゞきへらさるゝは彼が不

仕合なるべけれど、長日の盡休

みには、若おのこに引よせられ

てかりの枕をかわす時は、逢戀

待こひの夢をもちぎり、または

足なき蠢盤のかたすみに雇れて

は、仙家の交りもなせど、朽折

たるためしも聞ず。かくて彼れ

ほどかたく目出度物はあらね

ど、生涯木枕をたゞく罪ありて、

假にもやさしき女の手にふれざ

るをこそ恨なるとや。ある夜ひ

そかに彼が後の世のねがひをきくに、かくて生涯の罪人なれば、衣うつ槌に生れんよりは、烟うつ鎌に生んか、たゞしはもとの振紐か。

花のさく奥に何する槌の音

題 雲助

長持や身はとんぼうの露の旅

世のうきはうきともしらで、うきはわかれの雪轉し、と諷ひけり。

たはれ女の頬先赤し雪の朝

人の月ざる時は晝寐を友として、一飯をたくはふ。渴するに眼を明けて生涯の貧しき事をしれども、五器携ふ乞食にもあらず。只諷諫を腸にして、今日より死るまで、おのれを愼まんと、天にちかひ地に俯すのみ。

きかさねて後口の見へぬ寒さ哉

はいかいの道は例の自問自答の執行より、人和のひとつを守る

べきおしへなりとぞ。此道をよくたもつべし。よくたもたんやいなと、心にこゝろの戒を立て、常に我髪を結びなれし彼石松が剃刀をいたゞき、其石の名のかたく、松は千とせの色をかえぬ例しなれば、今月今日翁の忌日たるをさちに、四十九年の先はいさしらず、廿九年の罪をあらためんと、世の中よかれの樂坊主とはなりぬ。

けふよりは頭巾の恩もしる身哉

爐一ツをむすびて、月雪に人もふくる處とし、さらに世の富貴と車馬の喧すきはしらざる也。こはもとひとりを愼めてふひじりのふるをこゝろざしとす。

後の世のおもはるゝ時峰の松

燈火のおのれもしらぬひかり哉

世の諺に龜の甲より年の功といふ事侍る。そは智ありてかたきでふことにや。又老ばれたるも

あなれば、其たのみもすくなくりけり。しかあらば年の功より龜の甲なるか。龜はもと此争ひをしらず。唯波にかくれて我をうしなひ、泥に尾を引てまたあらはる。是を書ものは凡にかくれて分別をなさざれ。

萬代もたのまねばこそ池の龜

離別

君が晋妻のかたへ駒をすゝめ給ふに

不二は白雲櫻に駒の歩みかな

此程是非亭にやどりて是非を諍もの無量背岐其愼、其外儒あり、僧あり。この是非によりて三日四夜をかさぬ。いまだ是非の盡ざれども、今日は、はりまのかたへおもむかん名残をといむるに

盡ぬうち散りて見せけりけしの花

道の邊の柳かげには、しばしとてこそたちどまりつれ。手は此

三伏のあつきに、こゝの柳澤の
山陰に十日あまりの旅寐しける
が、けふは新友にいとまをこひ
て立きざんとするころ

結びさる清水かるゝな柳澤

別いふ手すさびなくて蚊遣哉

文月のはじめ蟬蛾のゝ落柿舎に
たび寐して、朝とく別るゝに

秋たつや起出るかたにあらし山

玉屑法師の旅におもむきけるに、
小硯をはなむけして

墨坪の奥はよし野と姨捨と

脱負が西國におもむきけるを送
りて

日くれなば花をあるじの首途かな

羈旅

牛窓

春の夜やうしをうしとも夢心

象頭山

はるふかく眞晝も杉のあらし哉

落馬して腰うつ影もさくらかな

丸龜を船出すに、若海旭に映じ
て澗たり。讃岐芙蓉このか
たにさしむかひ、備の二州のか
たは遙に山をつらねて霞み、伊
豫路は白雲のか、れるあたりに
して、哭楚東南にわかれたるも
かくあらん。乾坤眼に極がたし。

こゝろ問へいづくことまりの春の海

白石

白石の影砕け行海月かな

内の海といふ隠戸の迫戸ちかく
船の往來も、わきて潮のかけ引
をよく得ざれば危事おほしとぞ。
かくて月はひがしの遠山にいと
赤くときし出れば、親あるも
子をもてるも旅のこゝろあらた
まりて、十日あまりの浪の上の
明暮に面ナ日に焦したるを、人
もこちねる体にて古郷のかたを
打ながめ居つゝ、月のいつか丑
みつをすぐもしらざりけり。

身一ツは浪も寐よげに春の月

いつくしま

廻廊や潮満月にさくらあり

千疊敷

うみ山を霞いれたる坐敷かな

社頭鹿

枕にもなれよ旅寐の春の鹿

連歌堂にて

散る花を墨に摺り込め旅硯

宿とりて風呂に入間も山さくら

手枕松

すどしや松の響きを夢ごゝろ

二軒茶店

行春もしらぬ往來や下河原

杜宇古郷をめぐる夢ぞきく

天明らかに五ツの年にあたれる
良夜は、但馬の國なる人々ゝに
契りて、温泉の里今津てふ河邊
に舟をうかべ、彼北國日和定め
なきと吾翁も心に遊び給ふは此

月の夜頃のごとく、さなる古事
のかがへもいといみじう覺ゆ
れば、先待宵より月を弄びて猶
翌の夜を約せんとす。

待宵やおろかに契る月の雲

夜明れば酒さかなとあらため、
いとおかしかりけるに、おもふ
どち數まさりつゝ、日もいま
だ暮さるより、月は東にあらは
れ、眺め又新たに、船はさゝの
浦左りに、來日の隸右になし、
江の上にむかひて漕のぼるに、
波は金のどく花を散らせる上に
居たり。

こゝろ皆浪にながれて月の京
名月や更て來日の峰高き

佐野の八幡寺のけしきは、あさ
もよひきの浦くも、うたかた
のあはちの、あはれるけしき
なりけるを

さのゝ小春和歌の浦邊は鶴あらん

四條河原のほとりなる水月樓に

やどりて

乞食の五器に求食るか小夜衛

伏見船中

笠船や夢に時雨るゝ八幡山

名所

幾人か千世の古道子日せり
芹川のあたりは深し春の水
短夜や夢さき川の朝わたり
蒲公英や音なし川のへり塘
立雁の負ても行かで浮御堂
經つり妻はまつほのうら船か
春の夜や雨をふくめる須磨の月

院磨のうらにいたりて壽永の昔
をおもふに、出て遊ぶ胡蝶、人
にかくるゝ雉子のおもかげも、
いかなる夢のはしにやあらんと
あはれを催し侍る。

陽炎の夢をつなぐか須磨の花

よしの山

七夜寐ても花の半はやよしの山
夜ありきものはなのあかりや芳野山

あらし山の花は、水涓々ときび
しく、松腦くんと深し。さらに
我境ともおもはざりけるに

花にさはぐ都の人よあらし山
はな散りて三日月高し嵐山

心敬僧都の、散花の音聞程の深
山かな、と陰に給ふ寂靜谷にて

わくら葉の落る間宿る太山哉
水鶏なくかたのゝさとは薄月夜

なちにて

白瀧や六月寒き水煙り

室津臨江庵にて

すゞしや繪島をひたす月の海
生のびよ尾上の松の下すゞみ
秋たつやいなな笹原うつり来る
橋立や夜明くゝの天の川

舞子の濱にて

名月や松に名あらば祇王祇女

やるかたのなきに見て泣須磨の月
立出ていざ久間見川けふの月
射おとすか夢野の鹿の夜の聲

高雄にて

紅葉踏て攀る寺の禁酒哉
曉やしほたれ山の秋の霜
難波津や橋めぐりして夜の雪

哀傷

墓原や是をうき世の山ざくら
門人奥村耳香を悼

わすれては坐をあけてまつ夕涼

蘿來を悼む

魂を招かむ月や萩のうへ

桃如を悼む

なみだには染ずもまつ秋の風

梅谷氏脱負がひとりのみどり子
をもてり。去年子が見しころは、

小田の早苗のとりに、すそ
つむ花の色を添て、いとまめや

かに生たちけるが、今とし又門
ふに、梅の苔のひらきもあへず、
夜のあらしのいたく吹て、佛の
別れの跡をしたひ、共に涅槃の
誠に入ぬとや。げにかた身の袖
のむらさきも、この曉のなみだ
なりけるを

ものいはどうしといふらん箱の雛

兩人が妻身まかりけるを悼む

夜は猶おもひゆられて五月雨

夜半のぬし、共に風雅を相かた

るふひとりなりけるが、おのれ
に先だち身まかりけるをかなし
みて

燈もたよりも消る霜夜かな

緑翁を悼む

死ぬををしつて死けり秋の風

三木氏美喜女を悼

胸あはぬ日もありつらん花衣

蝦交を悼む

菊よ月よ我ひとり泣友にせん

重羽を悼む

花とさくもなき俳歌われもかう

玉のどくなるみどり子の身まか
りけるをいたみて

菊桔梗いづれか顔に似る花ぞ

きのふ見し人にはけふはわか
れ、翌はいかなる世のありさま
ならん。我はたゞ父もなく母も

なく、したしき友を柱の如く杖

のどく、おもふかひなく今年は
無一房にわかれ、薪水にはなる。

唯さへ秋のひとかたならぬ物か

ら

あの譯を聞たし秋の烏啼

雪中菴をいたむ

我おもひ雪の箱根を越さで泣

洪園を悼む

我なみだ地にしむ時か曉の霜

宗俣を悼む

二十五年今朝あだしのゝ塚の霜

扇塚開眼 船橋南園寺にて

壁を添て塚の名ひゞけ青嵐

佐屋の水鶏塚にて

俤や藪あり月あり水鶏なく

初秋の四十もうとき寐覺哉

贈 答

半生堂の病床を叩て、主の閑をやぶる。

やむ人によしのをかたる春の雨

陰月四日のあした、雪のいとふかく降けるに、杖笠とりあへずうかれいづるつるで、茶をたしめる法師を訪ふに、とみに釜たぎり、宵の挽ためありとて、見ぬ世の友のなつかしげに、こち居たる舩にてもてなされけるに

梅柳の故人茶に又雪の朝朝

初て藁庵を訪ふ。誠にあかざの枝をもて梁となし、葉をもて雨をしぐの柄なりける。春夏は其芽を摘て三日の根となし、かゝるゝ時は雪の日の杖となし、かゝるゝ

よし。清貧誰かうたがはん。

夏草やうき世を覗く窓一ツ

可群が酒店に遊ぶ

酒の香を松にかこみて青嵐

初て是非亭に來りて主と是非をあげつるふ。そも何の是非なるや。天をこゝろとし、地を身となし、四時に隨て四時を友とするに、何の是非なるにや。道を守りて道をうしなひ、道にそむきて道に叶ふ。是滑稽の是非なるにや。予はたゞきのふも非にして今日も又非なり。いつかは是なる時を見ん。唯人情の止事を得ずして、みじか夜の賦を催せば、主にかづきのををかふて是非もなく打ふしぬ。

我儘のひとり寐うれし旅の蚊や

無疊亭にはじめてまかりけるに、ほとりの池水に卵花咲そひて月もいとあかゝりけるに、子規水鶏の聲をまちて夜もいねがてに、聞そらずまじなどいと

興ありける。

短夜をきそふこゝろよ老の夢

うとければうとし、問るれば又なつかし。

花菖蒲津田の細江の便かな

鶴國が父の閑亭にて

すゞしさや垣のとなりは極樂寺

柏木何某の栖る方は、海前にたたへ、山後に攀てとこしなへなり。仁智いづれによるにや。主の心ばへいと風流にして、庭前の樹ノもそれに倣にや。天つちのまゝを生いづる中に、古松二もとの屈曲、千とせの色をかこみ、蓬萊のしま根もいづこならん。さりや世ノに聞傳ふ武隈あねは曾根幸崎の松といへども、明春の眺とする事の遠く侍れば、主のこゝろさしの如くする事あらざり。かゝるたものしき旅のやどりを求しは、柴山の主のおもふどの情なるめり。よてほ句一くさをものして筆を

とどむ。

千とせぬぬらん涼しく宿る松の蔭

佐用の久保軒に主せられて月の
客となる。この里は朝毎に霧ふ

かくたちて、蒙朧たるけしき、さ
ながら春の佛にも似たりけり。

薄霧に花の香あらんけふの月

明月亭

橙の色を木の間の冬の月

ある人に對して

もの凄き道のこりけり岩の霜

千鳥聞其ちどりこそ生き佛

鷺里亭

うぐひすの巢の隣あり冬籠

丹波なる誰かれの社中に示して

たはむ程力いれけり雪の竹

竹裡舍

客あれや雪ふらぬ夜は竹の月ま

客となりて雪降迄は竹の月

畫 讃

海老 老花が一輪に

髭にまで孫子重ねつかざり海老

西行の畫に

花の香や袈裟も衣も腸も

十牛 巴歌一軸

牛の尾も残らぬ色や春の草

一圓相 和歌舎一軸

花の牛追ふものは牛を追ふ

行平賛

時雨聞て腸さぐる寐覺かな

峰入の畫

貝吹て雲踏わけよ花の跡

かよひ小町の畫

百夜かよふ初日は白牡丹

布袋

空も又空をやぶりて時鳥

脱負きたりて、渡法師があやめ

刈居る畫に讃を乞けるに

いつの世に戀せし人ぞ菖蒲刈

東園亭 物の言

揚まりや暫しかゝりし月の雲

寒山十徳 谷書

夜遊びや二人が心月一ツ

瓢の畫

人ありて琵琶にや作る長瓢

小原女の畫

野の道を傳ひて山より薪をかつ

ぎ出る明くれの姿は、まことに孝

ある人と見へ侍れば、いみじう

なつかしく、戀はかゝる女にこ

そあなりけり。

親も夫もいたゞく柴の木實哉

福祿 壽贊

此人のこぼせし種か福壽艸

達磨の畫

見盡して不斷櫻と成にけり

林間燭酒畫讃

霜きえて酒の煙れる紅葉哉

我白に自畫自讃をつかはして

月今宵故人まぶたにうかむや夢

養狩の齋

小坊主の智は水によるほたる哉

通玄の齋

一陽を出て走るや瓢の駒

賀

野上を賀す

五十まで母もつ人ぞ花の春

常和八十の賀

山鳥の尾のながき日を鳩の杖

初雛の末永き心を

桃さくら其奥床し夜の雛

何某が初の端午を祝して

家も身も職立世を得たりけり

布舟が暮櫻亭にかくれ住けるを

賀して

春に逢ふ寄居虫の宿や梅さくら

茶人宗巴八十の賀

千年の縁を松の自在釜

三木如三七十の賀

つたへ置け桃咲宿の不老不死

岸本社甫七十の賀

茶と酒の世の中あかき紙衣哉

五斗米のために腰を折ざるが故

に、田園のある、日なく、常の

ころなほ静に、おのづからな

がき齡ひのはじめといへる、む

そじあまりひとつの春をむかへ

ける農家の翁、風扇稚子をほぎ

どすとして

耕して鶴をまねけよ杖の友

脱負が雛はじめを賀して

鶴も巢を今日かけ初めむ雛の宿

たれをこひかれをまつべき身に

しあらねど、此頃頭雛とかいへ

るやまひ大狐ほどになれり。身

にせまりていかむともなしがた

船ばたや履ぬぎ捨る水の月

る船につくらむか。

世の人の風雅にをける、抑さく

らのにしきをあらそひ、蝶鳥の

おのがさまなる其風情の、

いさゝか實におち入、虚にそこ

なふもの數をしらず。むかしの

人のいと筋を傳へつゝあるかな

きかにして、糸によるものなら

なくにと詠じ給ひしは、其頃の

うた屑にといひもてはやせし

も、今はその屑なるものも床し

くぞ侍る。俳諧の句を求るに、

遍照があだに黒主がいやしきさ

雲も、こゝろをとりはせられざ

れ。唯そのさま、人の面のどひと

しからざるのとへならんか。

此心になく姿は千々にわかつ。

是幻術第一の糸断なりけり。し

ころより入ものは、幻術自他に
をよぼすなり。予人に會すると
の夜、此幻術の箱をひらきて、
眼前に海山をつくり、嚴寒に花
を咲せ炎天に雪を降す。是無幻
の幻なり。幻人幻境に對し、幻
境もまた幻なり。何がしの翁の
句、皆この境に入て玄々の玄
なり。我又此境をしたふ。是が爲
に月花のつぶねとなる。廣く衆
に交りて此道に遊べる人を友と
せんと、かけまくもかしこき天
満おぼん神にちかへて筆を染侍
る。

青蘿

花も實もたのまぬをとへ栗の本

雲水の吾みかのしほ播磨の國に、みやびのまじらひ深かりし鹿兒のわたり幽松庵のぬし青羅詞宗、五とせあとに世をさりぬとなむ。このたび同國姫山なる玄駒のもとより、彼叟が生涯の發句をかいあつめ、とちぶみとなし、此するに詞かいつけよと、吾が長門の國に卓錫の日、はろくゝと贈りこせり。是を閱せるに、心崑崙の麓をめぐりてしら玉を拾ふがどく、大液に船を浮めて黃鶴の麗はしき聲を聞にひとし。誠や夢に白鳳を吐、金龜をのみし人の遺草とやいはむ。今更むかしを思ひ、藻にすむ虫のわれからといなみがたくて、へみ(蛇)をゑがくに足を添るのあやまちもかえり見ず、みじかき筆を採りぬ。これを櫻木にあり残さむは、蕉門の正風を學ぶものゝひとつの梯ならむか。寛政七ツのとし花見月三日夜、東都行脚花縣、赤間關田東菴のとし火のものとに書。



題青蘿集後

青蘿集二卷。其門人玉屑之所輯也。青蘿世仕我藩。爲人灑落。好作諧歌。常放浪乎山水。未嘗以憂樂經心也。有故落魄爲僧。遂以諧歌自任。於是一時崇尚之徒。推以爲宗匠。後被宥得出入于藩。中之人。師事之者多。今茲遺稿成。書肆玄駒將梓之。携來請余一言。余於青蘿爲姻族。喜玄駒之舉。因書卷末云爾。

寬政七年乙卯中秋

姫路 鈴木昌則

印 印

齋藤生厚書

印 印

寛政九丁巳歲

書林

京寺町二條下

橘屋治兵衛

大坂頻慶町心齋橋東入

柏原屋與左衛門

播州姫路元塩町

隅屋喜右衛門